

平成 27（2015）年度 NGO 海外スタディ・プログラム最終報告書

提出日	2015 年 12 月 14 日
氏名	竹崎恵
所属団体(正式名称)	公益財団法人 プラン・ジャパン
受入機関名（所在国）	プラン・フィリピン(フィリピン)
研修期間	2015 年 10 月 25 日～2015 年 11 月 14 日
研修テーマ	目標達成による支援地域からの撤退プロセスおよび、継続支援につながる 成果報告のノウハウについて学ぶ

目次

1. 導入	2
2. 本文	3
3. 考察・提言	9
3-1 結論	9
3-2 本研修成果の自団体、NGO セクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法	11
3-3 テーマに関する日本の国際協力分野への提言	12
4. 団体としての今後の取り組み方針（団体責任者記入、800 字程度）	12
5. その他	13
5-1. 本プログラムや事務局側に対する提案・要望等	13
5.2. 写真類	14

1. 導入

研修の目的と狙い

今回の研修では、「目標達成による支援地域からの撤退プロセスおよび、継続支援につながる成果報告のノウハウについて学ぶ」ことを主な目的とした。

プラン・インターナショナルでは、活動国 51 カ国で住民参加型地域開発や緊急支援など、さまざまな活動を行っている。今回の研修では、活動国の一つであるプラン・フィリピンを訪問し、「プラン・スポンサーシップ・プログラム」のもと、「Child-centered Community Development(CCCD)：子どもとともに進めるコミュニティ開発」の手法を使って現地で行われている住民参加型地域開発について、その撤退プロセスを現地事務所で開催することができた。

JICA 草の根技術協力事業など、3～5 年単位のプロジェクトでは、プロジェクトごとに実施前・中・後にモニタリング評価のための予算が確保されているが、スポンサーシップ・プログラムでは、撤退の時期決定やモニタリング評価の役割は活動国や国際本部が担っている。そのため、支援国の担当者が実際に撤退間近の地域を訪問して、モニタリング評価を行うことは一般的ではない。

一方、日本の支援者に情報提供する立場から言えば、現地事務所や国統括事務所から送られてくる情報をもとに、支援者へ説明をすることにもどかしさもあった。

そこで今回の研修では、具体的に、

- スポンサーシップの成果の尺度
- スポンサーシップの有効性
- 撤退決定の基準やプロセス
- 撤退した地域の、その後の継続性評価

について学ぶことを主眼にした。さらに、撤退とは本来祝うべきことであるにも関わらず、成果を発表する場がなく、逆に支援者の支援終了のきっかけともなってしまうことから、成果を効果的に広報することで、支援者の継続支援につながられないか、という狙いもあった。

学習課題

特に下記 3 点を事前に学習課題に据え、研修に臨んだ。

Q. コミュニティと協力した地域開発において、NGO の撤退の判断基準となるべき指標は何か

Q. NGO 撤退後もコミュニティが持続的な開発を続けていくために、必要な仕組みは何か

Q. 3-5 年のプログラムを実施したコミュニティと、10 年以上もプランが関与したコミュニティで決定的に違うことは何か、

仮説

3-5 年の単発プログラムを実施する場合、コミュニティとの関係構築だけで最初の 1-2 年を費やし、プログラム終了後の持続的発展まで担保することは難しい。一方、プランが行っている地域開発の手法は、スポンサーシップのもと、8 つの分野でのプログラムをコミュニティの事情や環境、そしてプランの予算にあわせて、さまざまなタイミング、エリア、規模で実施していくことができる。また、時間をかけて住民と関係

構築を図りながら、活動を展開するため、住民の意識や行動変容をもたらすことができ、最終的には、より広範囲の住民を支援し、撤退後も住民による自主的な活動の継続を期待することができる。

2. 本文

今回訪問した地域でのプランの活動状況

まず、最初に訪れたサマールイースト地域は、プランが 2001 年から活動を開始して、今年で 14 年目だが、撤退計画はなく、今後も引き続き活動を継続していく予定である。2013 年 11 月 8 日に超大型台風ハイエンによって大きな被害を受けたため、現在は復興途上にある。

次に訪れたサザンレイテ地域は、1998 年に活動を開始して今年で 17 年を迎える。この地域では、来年 6 月の撤退を予定しており、現在はその準備を進めている。

最後に訪れたのはカモテス諸島でプラン・フィリピンが活動をはじめたのは 1990 年である。コミュニティが十分な能力を身につけ、今後は自分たちの力でコミュニティ開発を継続していくことができると判断し、撤退したのは、21 年後の 2011 年である。プランはこの地域から 4 年前に完全撤退し、事務所も引き払っている。



現在の活動地域

プラン・ジャパン HP より

子どもとともに進めるコミュニティ開発（CCCD）とは

「子どもとともに進めるコミュニティ開発」とは、住民参加型地域開発の一種である。

まず、コミュニティのニーズを住民たちと一緒に調査し、活動内容について住民たちへの説明会を開く。コミュニティとの合意が得られれば、チャイルドを登録し、活動を本格的にスタート。まずはプランが参加型開発プロセスを主導する。コミュニティ組織の形成や能力育成、パートナー団体との連携を図りつつ、徐々にコミュニティや子どもたちの参加を引き出し、最終的にはコミュニティにプログラムを根付かせる。そして行政機関に責任を委譲して、社会福祉サービスが十分制度化、組織化され、コミュニティのガバナンス能力が高まったことを確認すると、コミュニティから撤退し、次のより深刻な貧困地域での活動を開始する。

活動期間はコミュニティの状況や国の政治・財政状況、自然災害などによっても大きく左右されるため、一概には言えないが、理想は 8~10 年。実際の平均は 15 年とされている。サザンレイテは 18 年、カモテスは 21 年かかっていることから、フィリピンは開発のスピードが緩やかで、自立までに時間がかかっていると言える。

撤退のプロセス

現地事務所では、地域からの撤退を 2 年かけて準備する。まず撤退前に事前評価を実施する。その結果、撤退に向けた準備が整っている、と判断された場合には、現地事務所長からプラン・フィリピン国統括事務所

へ 2 年後の撤退を計画する提案書が提出される。国統括事務所で承認後、アジア地域事務所（Asia Regional Office）での稟議にかけられる。アジア地域事務所で承認されると、国際本部（International Headquarter）に通達される。

撤退が正式決定されてからの猶予期間となる 2 年間は、まだコミュニティに足りない分野、もしくは持続性を高めるためのプログラム（Catch-up program）を実施して、撤退後もコミュニティ開発が継続できるような支援を行う。

また、To Do リストに添って関係各所への連絡、チャイルドの登録終了手続きなど事務的な処理も行う。支援国への連絡は 18 カ月前に一斉に行い、6 カ月前には地域での活動成果の報告書を支援国へ提出することが求められている。

Phase-Out Plan
Southern Leyte Program Unit
FY'14-16

Major Activities	Timeline											
	FY '14			FY '15			FY '16					
	July-Oct	Apr-June	Jul-Sept	Oct-Dec	Jan-Mar	Apr-June	Jul-Sept	Oct-Dec	Jan-Mar	Apr-June	Jul-Sept	Oct-Dec
A. Pre Phase-Out Activities												
Development of PU Phase-Out Plan												
Meeting with the country staff												
Orientation of PU staff												
Gathering of data or information and Assessment of current situation												
a. Conduct of Community Assessment												
b. Updating of community plans												
Analysis of Assessment Results at PU level												
Phase-Out Planning with all Staff												
Submission of Phase-out Request and Phase Out Plan to Country Office												
Approval of Phase-Out Request -CO/NO												
Notification of NO												
Program Implementation based from the PU Program Plan												
Community-wide Information Campaign re: Phase-out												
Implementation of activities to bridge the gap/ fill unmet needs of the communities												
Strengthening of Organized Groups and Community Development Processes												
Handing over of programs to networks/linkages/community groups/ government units												
B. Actual Phase-Out												
Conduct of Home Visits/Interview with Sponsored Families												
Review/Validation and Submission CMSC/GMSCs												
Extending continuing technical assistance to project implementation												
Ceremonial Turn Over/ Graduation ceremonies												
Inventory and Disposal of Fixed Assets												
Turn-over & Storage of program, admin and sponsorship Files												
Securing Staff Clearance												
Closing of Personnel Records												
Final Settlement of all obligations												
Exit Meetings												
Submission of Final Program, Admin and Sponsorship reports												

サザンレイテ事務所作成の撤退計画

サザンレイテ事務所では、2013 年から準備、当初は 2015 年 6 月に撤退する予定だったが、台風ハイエンの影響で 1 年延期された。現在は、来年 6 月の完全撤退に向けて、すでに自治体やコミュニティへの説明も終え、持続性を高めるために必要なプログラムを中心に、残りの期間に必要な支援に優先順位をつけて導入している。撤退にあたっては、各コミュニティでプラン職員、コミュニティ・ボランティア、子どもたちや住民、自治体職員や政府関係者、パートナー団体など関係者を集めて、盛大に『卒業式』を実施。コミュニティの自立を促し、自治体への責任委譲を行う。サザンレイテでは、今後 1~2 月に各バランガイ（最小行政単位）ごとに Graduation ceremony を開く予定。

プラン・フィリピンでは、8 つの分野のうち、特に Batang Lusog(保健)、Batang Listo(教育)、Batang Ligtas(子どもの保護)、Batang Bida(子どもの参加)を主なテーマに活動している。そして、こうしたすべての活動には、ジェンダー平等や災害リスク軽減の視点が横断的に取り入れられている。

さまざまな活動にはチャイルドだけでなく、誰でも参加することができ、トレーニングには行政機関の担当職員や町やバランガイのリーダーなども招かれる。

サザンレイテ事務所での主な活動

サザンレイテ事務所は、RegionVIII サザンレイテ州の 19 の Municipality（町）のうち、5 つの町で活動している。それぞれの町にはバランガイ（村）という最小行政単位があり、プランは 92 のバランガイで活動している。

サザンレイテ事務所が登録しているチャイルドの数は、女の子 1,985 人、男の子 1,664 人、あわせて 3,649 人、そのうち日本の支援者と交流しているチャイルドは 201 人である。

活動規模

プラン・フィリピン 年間プログラム費（1,000 ユーロ）

	2010	2011	2012	2013	2014
保健	526	527	649	581	1160
性と生殖	0	0	0	0	0
教育	2042	2084	1387	1064	956
水と衛生	636	769	778	764	506
家計安定	1294	2256	2071	1165	389
保護	203	231	255	318	234
参加	333	576	464	556	576
緊急	490	496	2047	2994	23952
共通	2637	2792	3256	2955	2826
SPcomms	477	605	602	313	384
計	8638	10336	11508	10711	30983

プラン・ジャパン年次報告書（2010-2014 年度版）より

活動範囲

	活動開始	活動終了	町	バランガイ (村)	世帯数	チャイルド登録している 子どものいる世帯
サザンレイテ	1998	2016.6 (予定)	5	92	11,904	6,349
カモテス	1990	2011	4	56	17,364	3,090

Plan Philippines Baseline Study 2010 より

コミュニティ組織の例 1:

コミュニティ貯蓄グループ（Community-managed Saving Group）/リロアン町バランガイ Anilao

コミュニティ貯蓄グループの定例ミーティングを見学。コミュニティ貯蓄グループとは、女性や貧しい世帯の生計改善の一環として行われている活動の一つ。毎週定期的に少額ずつ貯蓄していくことで、計画的な家計管理、そして収入創出活動への出資ができるようになる仕組みのこと。

27歳～79歳までの女性が参加している。幹部5人、メンバー21人のこのグループは毎週日曜日に会合を開いている。このバランガイでは、今年で4年目の取り組み、最初のグループが次のグループを教えながら増やしている。他から要請があれば、教えに行くこともある。

バランガイキャプテン Hagle Monghit さんは第1回から参加するメンバー。現在はトレーナーも努めており、これまで200人以上の見学者がこのバランガイを訪れている。

1 サイクル9ヶ月で終了し、グループの貯蓄はグループメンバーで分配される。メンバーの使い道は、洗濯機、DVD プレーヤー、土地、豚、トライシクルの修理、子どもの大学入学金など。この活動は、家計管理の訓練にもなるが、同時に「決まった時間に毎週定期的に集まる」、「人前できちんと発言する」といった練習にもなるとのこと。1年ごとにメンバーの役割も交代させ、なるべく多くの人が議事進行役を努めるようにする。

コミュニティ組織の例 2:

バランガイ Kawayan の水管理組合 (KARWASA:Kawayan Rural Water and Sanitation Association)

2001年に給水設備を建設。以前から水は山にふんだんにあったが、泉まで水汲みに行かなければならず、重労働しかも時間のかかる作業だった。また、水を媒介とする病気も蔓延していた。

プランが建設費用を出すことで、町やバランガイも少しずつ負担することになる。また、バランガイ住民は、住民組織を結成して、建設中の食事を提供。参加意識、オーナーシップを持つようにした。

住民組織で運営管理している。3～5年ほどは無給だったが、今は少しの謝礼(125ペソ/月)を得ている。運営幹部メンバーは5人、3年の任期で交代。一人で管理するのではなく、共同運営に努めている。

さらに、KARWASAのような組合が集まり、連合体を結成(Southern Leyte Federation of Water Association : SOLEFEWA)。SOLEFEWAは、8つの組合が参加している連盟で15の給水設備を管理している。SOLEFEWAの月例集会にはKARWASAからも3人の代表や、法律アドバイザーが出席し、プラン撤退後も法律上のアドバイスを受けられる体制が整っている。

住民たちの間に、最初は「水は神様から与えられているものなのに、なぜお金を払わなければならないのか」、という考えがあった。ただ、プランのトレーニングなどを通じて水道管を引き込むための費用やメーター管理、メンテナンス費用が必要であること、それがなければ維持できないことを根気よく説明していった。

今では150世帯にメーターを設置して給水し、65ペソ・10m³、それ以上は12ペソ・m³ごとに課金している。水が通ったおかげで、これまで半農半漁の生活だったが、養鶏などを始めた世帯もある。また、運営幹部メンバーには、屋外排泄ゼロに向けた意識啓発やコミュニティ総合衛生管理のトレーニング受講が義務づけられている。

参加者の声

インタビュー 1：元チャイルドからプラン職員になった Val

Valentine A. Escabillas 27 歳、男性

現在は、プランの Community Development Facilitator: CDF（フィールドスタッフ）としてサンフランシスコ町の、23 のバランガイのうち、11 を担当している。

プランは 1998 年からサザンレイテで活動を開始。Val は当時小学 4 年生だった。プラン・オランダの支援者と交流する一方、プランの活動に非常に熱心に参加していた。意識啓発トレーニングやチャイルドクラブに参加、Baranguay Child Association（BCA）でチャイルドリーダーとしてリーダーシップトレーニングを受講。さらに他のバランガイのチャイルドリーダーたちに会ったり、大きな会議に招かれたり、外の世界を知ることができたことで世界が広がったと話す。

インタビュー 2：元チャイルドから教師になった Chary

元チャイルドとして日本の支援者と交流していた Chary Ann（24）。今は Libagon ハイスクールで英語教師として活躍中。「18 歳登録終了まで交流した日本の支援者のことは、今でも名前を覚えているし、手紙で何度も励まされた」と語った。

なぜサザンレイテは撤退準備ができた、と判断されたのか

1. コミュニティの状況が改善された

それぞれのバランガイには、学校、保健所、バランガイホールなど公共施設が整っている。

以前にはなかった保育所も設置され、多くの親が子どもを保育所に通わせるようになった。

プランの活動によって見られた変化について：

両親の体罰が問題になっていたが、ポジティブ・ディシプリン(前向きな子育て法/褒めて伸ばす教育法)や、親業トレーニングなどを通じて、親の態度に変化が見られ、体罰ではなく、言葉で叱るようになった。

子どもの虐待や人身取引の問題でも成果が上がっている。チャイルドヘルプラインが設置され、実際プランの活動により、母親に売られそうになった姉妹が保護されたケースもあった。

バランガイの住民組織は、プランの活動によって、参加意識が高まった。以前は人任せで、そういうことは役人にまかせておけばよい、と考える人が多かった。けれども今では、プランのトレーニングなどを何回も受けるうちに、住民の意識が変わり、自分たちが率先して考えなくてはというように、考えも行動も変わり、予算配分にも意見を出せるようになった。

また、教師によれば、プランのチャイルドは学業の面でも、態度の面でも他の生徒たちと明らかな違いがあるそう。人前ではきはきと話すことができたり、リーダーシップをとることができる。

2. 自治体が機能している

オフィスも近くに設置されているためか、自治体職員のプラン認知度は非常に高く、協力体制が整っていることが感じられた。

持続性を高めるための取り組み

撤退準備を進める中で、一番重要な項目として挙げられていたのは、ピア・エデュケーション、ローカルリソースの活用、そして行政機関の関与だった。

サザンレイテ事務所では、撤退準備の一環として、2015 年 10 月に元チャイルドや現チャイルド、政府関係者(社会福祉局、教育省、自治体)が一同に会したミーティングを実施。今では多くの元チャイルドや元チャイルドリーダーが立派に成長し、中には教師や政府関係者、薬剤師、プラン職員もいる。今後もコミュニティ組織がきちんと機能するように組織化し、継続していけるようにコミュニケーションの場を設けるという目的があった。

撤退の過程で必要なことは、組織が今後も継続できるような形に Institutionalize することが大切。特に子どもの場合、本人の育成には効果があったとしても、学校を卒業したり、成長するにしたがって、コミュニティを離れてしまい、それきり組織も自然消滅してしまったりすることが多い。子ども組織を存続させるために、Young Hearts（子どもメディアクラブ）を学校の活動へ組み入れる試みも行われていた。そうすることで、プランが撤退した後も学校の活動として継続していくことができる。

カモテス事務所の活動について

プランがカモテス諸島に事務所を設置したのは 1991 年。その後、23 年の間学校や保健所の建設から水委員会の立ち上げ、子どもグループの立ち上げ、教師トレーニングなど様々なプロジェクトを行った。2011 年に撤退し、4 年が経過している。

参加者の声

インタビュー3：トレーニング参加者 Alexander Dagatan

保育士、パラリーガル、水管理委員会メンバー、マッサージセラピストといくつものキャリアを持っている。こうしたキャリアはすべてプランのトレーニングを受けたことで得られたものである。

「プランのトレーニングによって非常に大きな影響を受けた」と語る Alex は、現在も積極的にマッサージセラピストのトレーニングなどを希望者に向けて続けている。プラン撤退後も同じような人材を育てていくためには、ピア・エデュケーションや継続的なトレーニング実施が欠かせない。現在、保育士へのトレーニングに関しては、MSWD(Municipal Social Worker Development)や LGU(Local Government Unit)からトレーニングを受けることができるとのこと。

Q.子どもグループはプラン撤退後活動していますか？

A.当時の子どもたちはみな成長して、カモテスを出て、現在は結婚したり、セブやマニラ、海外で働いているため、子どもグループは活動なし。ただし、教会の方で子どもグループは活動している、とのこと。子どもグループのアドバイザーとして教師のトレーニングも行っていたが、教師も異動するため、自然消滅か。ただ、元ユースリーダーが教師になった事例もあるとのこと。

Q.子どもイベントは？

A. Children's month が設定されているので、保育士たちが中心となって子どものためのイベントを企画。その際には、町の社会福祉開発局が主催している。

参加者の声

保健所 (Rural Health Unit: RHU) 職員へのヒアリング

保健所はプランの支援で設置されたが、撤退後は町が予算を確保している。

月 2 回予防接種キャンペーンを実施。15 のバランガイを巡回する Mobile unit もあり。ほぼ 100% の接種率達成している。出生登録は義務化されている。

保健所での出産も多いが、コストや慣れているからという理由で、まだ自宅出産を好む人もいる。

風邪や簡単な病気の場合には、診療無料で、薬を処方してもらうことができ、深刻なケースのみ病院へ紹介。

Teguis マングローブ農家組合 (Teguis Mangrove Farmers Association : TMAPAS)

プランの Livelihood プログラムの一環としてニツパヤシ (マングローブの一種) の葉を乾燥したものをコミュニティの人から購入して、他の人に売る事業を行っている。ニツパヤシは、屋根材、壁在などに使用され、100 枚 600~700PHP で販売している。そのうち、50PHP が利益となる。

利益は 3 ヶ月ごとに分配し、組合としての共通貯蓄もある。また、Cash for work として、環境天然資源省からの仕事を請け負い、マングローブの苗を育てる事業も開始。あるいは、魚網を設置して養殖事業も行っている。地元行政機関からは、補助金として 2,500PHP/月が組合に支給されている。

プランとは、2008 年から一緒に活動をはじめ、Tree planting や DRR プロジェクトなどを協業。プラン撤退後も問題なく組合を運営、トライ&エラーを重ねながら事業拡大を図っている。

3. 考察・提言

今回の研修では、活動中、撤退準備中、撤退後と 3 つの異なるフェーズにある活動地域を訪問して、それぞれの違いを実際に感じる事ができた。プランのスポンサーシップは 15 年以上という長い時間がかかるが、確実に地域の暮らしや人々の意識を変える効果があることがわかった。そして、プラン撤退後も、ある程度、存続可能であることが分かった。

3-1 結論

学習課題に対する回答

Q. コミュニティと協力した地域開発において、NGO の撤退の判断基準となるべき指標は何か

A. なぜ撤退するのか

1. コミュニティの状況が改善された

- ✓ 子どもの権利や責任についての意識が高まった
- ✓ 地元リーダーやコミュニティグループの能力が高まった
- ✓ 基本的なサービスを提供する体制が整っている (教育・保健、保護など)
- ✓ 家族やコミュニティの意思決定に子どもたちの意見が反映されている

2. 行政機関がきちんと機能している

- ✓ 基本的なサービス提供をサポートする体制が 整っている
- ✓ 子どものための予算やリソースが確保されている
- ✓ 子どものための政策/方針や条例が整備されている

3. 他の支援団体が活動

- ✓ 子どもの権利推進
- ✓ 住民参加

4. プランのプログラム目標を達成

- ✓ コミュニティに約束した期間(8-10 年)を過ぎた
- ✓ プランの支援を必要とする最貧地域から脱却

Q. NGO 撤退後もコミュニティが持続的な開発を続けていくために、必要な仕組みは何か

A. ローカル NGO との連携、自治体との連携・責任委譲、住民組織の運営幹部メンバーが順番に入れ替わるような仕組み（選挙制度やメンバー補充方法）、自主運営を可能にする資金調達手段の確保、子ども組織

Q. 3-5 年のプログラムを実施したコミュニティと、10 年以上もプランが関与したコミュニティで決定的に違うことは何か、

A. サザンレイテやカモテスでは、住民組織のメンバーとしての自覚が高く、自主的に運営できている。また、自らアイデアを提案したり、自治体へ助成を求めることができる。

先にイーストサマール地域を見たおかげで、サザンレイテからなぜ撤退するのか理解することができた。サザンレイテは街並みも整っており、行政機関がしっかり機能しているのが特徴的だった。また、人々の自信に満ちた表情も印象的だった。

水管理委員会、元 SC やチャイルドリーダーで今は教師やプラン職員、自治体職員として活躍している若者、CV、親、トレーニングを受けた教師、 balan ギャプテン、町長など、全員が自信を持って自分たちのグループやコミュニティへ貢献していた。

また、4 年前にプランが撤退した地域、カモテス諸島へ行き、分かったことは、水管理委員会など、自分たちで資金調達ができる組織や自治体と連携して活動している農業組合などは、プラン撤退後も存続していくことが十分可能だということである。実際には、プランが撤退した時には 16 だった保育所が、今は地域保育（SNP）も含めて 60 に増えているとの証言もあり、保育所に関してローカルリソースを活用して、行政機関をうまく巻き込んでいる、といえる。意識啓発やトレーニングを重視して活動を行った結果、「人」が育ち、地域の「リーダー」として活躍している実例ともいえる。こうした人材が地域に留まり、そして他の住民や子どもを巻き込んで活動を広げていくことが理想の形だと感じた。

いくつ保健所を建てたという撤退時のプランの成果も大切だが、その後どのくらい発展できたか、ということが実はコミュニティの成長を図る一番の成果ではないだろうか。

「プランが活動をしているときから常に撤退後を意識して、行政機関も必ず各種トレーニングには参加してもらい、自分たちの役割について意識を高めてもらっていた」という説明がプラン職員からあったが、コミ

ユニティの人材と行政機関とをつなぐ役目に関しては、プランの長期間の活動が確実に役立っているように感じた。

課題

一方、子ども組織の場合、その子個人の能力育成には大きく貢献したとしても、子どもたちはやがて成長し、学校や職場の都合で島を離れていってしまうため、現在残っている若者はほとんどいないことが分かった。子ども組織のアドバイザーとして教師も参加していたそうだが、教師も異動するため、自然消滅してしまったとのこと。現在ではプランが行っていたような子どもグループの活動は残念ながら見られなかった。ただし、教会などで子どもグループの活動はあるとの証言もあった。サザンレイテ事務所で現在試行しているような学校の活動へ組み入れることで、子どもグループの活動存続性にも改善が図られることを今後期待したい。

また、フィリピンのように自然災害が毎年のように襲う国では、せっかくプロジェクトが成果を挙げているとしても、土砂崩れや台風・高波などでコミュニティが壊滅状態となり、これまで積み上げてきた取り組みが一度に無に帰すリスクもある。そのため、自然災害に強いコミュニティ作りという視点が重要であると思われる。

3-2 本研修成果の自団体、NGO セクターの組織強化や活動の発展への活用方針・方法

成果の測り方や日本の支援者への伝え方

現在、活動成果報告書については、現地事務所に一任されており、規定フォーマットなど是用意されていないため、地域によってその質や量に差がある。そのため、報告書に盛り込むべき内容について、現地事務所へ支援者側の視点で必要な情報をインプットすることも必要である。

また、活動成果の測り方のうち、「量」的成果については、今後はSDGsの指標などを活用して、活動当初の基礎データと撤退時のデータを比較できる形で作成されることが望ましい。さらに、日本の支援者にとっては、「量」的成果とともに、支援の「質」に注目した成果や、撤退後の継続性について強調した報告を行うことで、より大きな満足感や実感が得られるのではないかと感じた。そのためには、撤退数年後のモニタリングを行うことも必要だと思われる。支援国から派遣するのは難しいが、活動国のスタッフが3年後に再訪してレポートするという方法などが考えられる。

量的成果の例：

- ・ 学校の数、保健所の数、井戸、給水施設の数
- ・ 保育所・小学校・中学校就学率、修了率
- ・ トレーニング実施数、参加人数、
- ・ トイレ・安全な水へのアクセス率
- ・ 予防接種の接種率
- ・ 子どもや女性への虐待発生数
- ・ 子どものコミュニティ組織への参加率

質的成果の例：

- ・ 撤退後も組織が継続、あるいはさらに拡大して活動を継続している
- ・ 撤退後も学校や保健所の社会サービスは向上を続けている
- ・ 撤退後もピア・トレーニングを実施している
- ・ 自分たちでは解決できない問題が生じたときに、必要な行政機関の手助けを求めることができる
- ・ プランの活動に参加した子どもが成長して、それぞれの職場で活躍している

3-3 テーマに関する日本の国際協力分野への提言

3~5 年の単発プロジェクトを実施する場合、プロジェクト終了後も継続的な開発活動を担保するため、コミュニティ組織のメンバーで貯蓄グループのように定期的に集まるグループを作り、そのプロジェクトに関するトレーニングだけではなく、リーダーシップトレーニングなど、主要メンバーの能力育成に力を入れることが有効であると思われる。また、既存メンバーだけではなく、1 年任期で運営メンバーを選挙で選ぶなど、新規メンバーを補充できるような制度を作ることによって組織も長く存続できる。また、子どもグループに関しては、プロジェクト終了後も引き続き活動を継続するには、行政機関だけでなく、学校や教会など、地域に根ざした機関との連携が必要になる。

4. 団体としての今後の取り組み方針

当団体の支援制度「プラン・スポンサーシップ」にとって、チャイルドと呼ばれる子どもとの一対一の交流と、その子どもを取り巻くコミュニティの底上げを図る地域開発のコンセプトは、容易に切り離せない要素である。今回の研修はそのうち、後者の成果をいかに効果的に寄付者に報告し、地味ながらも持続性のある地域開発という活動に理解と賛同を得、ひいては寄付リテラシー向上にもつながる情報発信を可能にすることを目的としていた。

研修結果として得られた内容は、長期にわたる地域開発だからこそなし得る「人」や「組織」を育てる力強い事例である。これまで一般的に発信してきたことと矛盾はないが、撤退予定のない地域、撤退予定のある地域、撤退後の地域と、3 つの異なるステージを俯瞰したことで、コミュニティや行政機関の成熟度の違いを確認でき、裏返せば円滑な撤退に必要な要素が浮かび上がってきたと言える。支援国側の事務局として、日本の支援者目線に立った効果的な切り口で、有益な情報発信をしていくことができると考えている。フィリピンのチャイルドと交流する当団体の支援者数は多いうえ、日本国内においてもフィリピンの認知度、関心は高い。撤退事例のみならず、出会った住民らのエピソードも含めて親しみやすい内容を盛り込むことも効果的であろう。

加えて、報告者が上述した撤退後コミュニティのモニタリングは日頃から支援者ニーズの高い部分であり、今後も同様の情報を事例として収集できるよう活動地域に働きかけをし、NGO として支援者内外含めて広く広報していくことの重要性も感じている。

SDG が国際的目標として導入される今、一過性の成果だけでなく先を見据えた活動の必要性を訴求する好機とも言える。この研修で確認できた成果は一例に過ぎないが、今後も当団体が世界各地に残してきた同様

の実績を市民や関係機関とも共有し、日本人の寄付という行為への信頼を向上させるべく引き続き取り組んでいきたい。

5. その他

5-1. 本プログラムや事務局側に対する提案・要望等

特になし

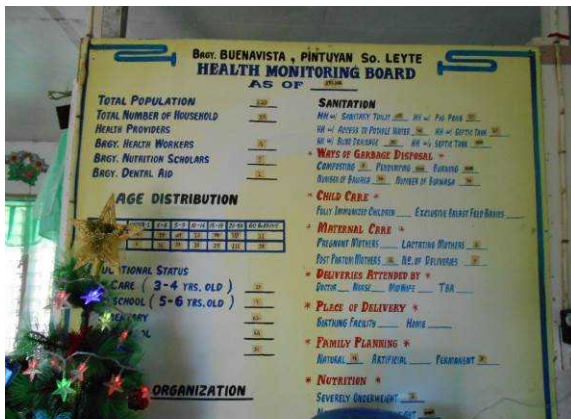
5.2. 写真類



プランが校舎建設を支援した Liloan National Technical-Vocational High School



Nahaong National High Schoolで活動するヤング・ハーツメディアクラブのメンバー



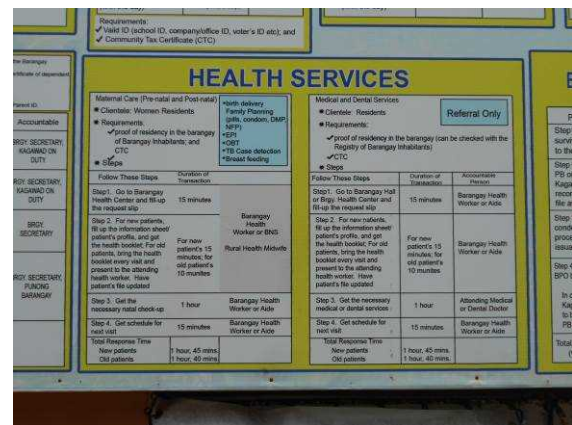
ブエナビスタ村の村事務所に表示されている一覧表



サンフランシスコ村の Habay デイケアセンター



リロアン町のハザードマップ



Pinut-an 村の公共サービスの申込方法についてのお知らせ



元チャイルドの Chary Ann、今は高校で英語を教える教師に



コミュニティ貯蓄グループ (Community-managed Saving Group) / リロアン町バランガイ Anilao



プランは、トレーニングと 15 アイテムからなるキットを提供。金庫、鍵、計算機、スタンプ台、スタンプ、ノート、入金袋など。

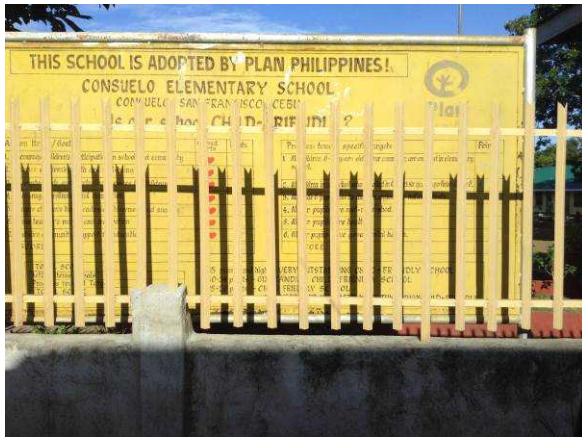


80 歳の KARWASA 代表者 Milagros Ariora



行政からの団体認定書や水道管敷設図などを保管

カモテス



プランが支援した小学校や女性・子ども保護ユニット



Teguis マングローブ農家組合



一定間隔でマングローブの苗を植樹



マングローブの苗を育てる苗床。



暑さ対策で日よけシェードも設置

サマルレイストオフィスにて、スポンサーシップマネージャー（中央）とサマルレイストオフィス事務所長（右）と



サザンレイテオフィスにて初日ブリーフィング



最終日のデブリーフィング



学校教師や生徒たちへのインタビュー



Fish Sanctuary の視察



保育所の先生、親へのインタビュー



カモテス 水管理組合のメンバーと

